

21世紀の日本における宋代的研究*

青木 敦

(日本) 大阪大学大学院文学研究科

1. 断代史研究の限界と必要性

報告者は、大阪大学文学部(大学院文学研究科)の東洋史学研究室に所属している。日本において、東洋史は、中国、韓国(朝鮮)、台湾、内陸アジア、東南アジア、印度、Islam諸地域などを指す。東洋史は更に一般に、縦文字文化圏(漢字圏、韓国)と、横文字文化圏(ベトナムを含む東南アジア以西)に区分されることがある。この中で、報告者が研究している宋代江南諸地域は、中国史であるが、中国の断代史的研究には、従来より批判がある。例えば、西夏が中国の正統王朝であったか否か、簡単には断じ難い。吉開将人は、近年、南越について、実証的研究を多く行っており¹、また南明も今後の重要な検討課題であろう²。

これらのなど正統王朝には含まれない王朝だけではなく、三省交界地帯の存在、民衆の把握など、前近代国家の政治支配領域は、極めて限られていた。確かに日本の高校では「唐—五代十国—北宋」「960年、宋の建国」と教えるが、北漢の滅亡は979年である。断代史は誤解を生じ易い。

しかし、それでも日本には、「唐代史研究会」「宋代史研究会」「明清夏合宿(の会)」が存在する(「五代十国史研究会」は存在しない!)。筆者が思うに、それは、史料学的な問題である。『長編』、『宋会要』、『要録』、『宋史』、宋臣の文集などの史料を用いて、宋朝を研究する者が研究者が、「宋代史研究者」なのである。これが、断代史が継続する理由である。一方、宋代史料を用いて、突厥を研究する者(例えば森安孝夫、荒川正晴)、東南アジアを研究する者(桃木至朗、深見純生)らは、決して、自分を宋代史・中国史研究者だというidentityを持っていない。研究者は、必ずしも史料の書き手と同じidentityを持っているわけではない。

2. 正か負か? —史料読解能力と学際的広がりとのbalance

* 本 paper は、2006年3月17日の報告のため、極めて短い時間で書いたものである。誤り・不足部分が多くあることをお断りしておく。

¹吉開将人「印からみた南越世界」『東洋文化研究所紀要』136、137、139、1998~2000、「『中国史』と『東南アジア史』のあいだ」『岩波講座 東南アジア史』3(月報)、岩波書店(東京)、2001など。

²南明の屈大均について歐初等主编『屈大均全集』(人民文学出版社、北京)1996。

1970年代までの日本の中国史研究と、1980年代以降のそれとは、研究の方向性が大きく異なっている。端的に言えば、70年代まではMarx主義が強かった。これについて、台湾の学生および歴史研究者諸賢は十分に承知している事だと考えられるので、説明は省略する。ここで報告者が強調したいのは、「日本の研究者の強み（強い点）が失われていないか？」という危惧である。例えば田中正俊が生前のある日、夢の中で明代の農民に出会い、その農民が田中先生に「我々の爲に、語れ！」と仏語Frenchで語ったという逸話は、あまりにも有名である³。1970年代までの多くの日本人中国史研究者は、マルクス主義を理解したが、それは西欧史と日本史の立場からの研究であった。戦後の思想史・経済史の代表的名著を残した島田虔次は、宋学から陽明学、特に李卓吾の思想には、近代西欧の個人主義の要素が見られるが、それは挫折したと論じた⁴。明代江南の木綿工業の発展が、西欧的な近代modernに発展する可能性を持っていたにも関わらず、資本家・官僚の地主的性格等の故に、中国において資本主義は生まれなかったと論じた⁵。しかし彼らは、Max Weber同様、「中国に欠如していた物」を求めていたに過ぎなかった。

無論、現在の研究者には、彼らのようなOrientalism⁶は存在しない。また、我々が参照する人類学や社会学の範囲も、広がった（当然、Marxismを遥かに超えている）。しかし、報告者が最も危惧するのは、彼らが持っていた、外国語の古典である古典漢文を自在に読む能力を、我々の世代が有しているかという点である。マルクス主義の時代の大学者に比して、我々は白文に正しく標点を打ち、文章の真意と曖昧さを見抜く能力は、落ちていないだろうか？

3. 若干の個別事例

³岸本美緒「追悼 田中正俊先生」『史學雑誌』112-1, 2003

⁴ 島田虔次『中国における近代思惟の挫折』筑摩書房, 1949

⁵ 西嶋定生『中国経済史研究』東京大学出版会, 1966

⁶ Edward W. Said. *Orientalism*. Pantheon Books, 1978 (邦訳: エドワード・W. サイド (今沢紀平訳)『オリエンタリズム』1986) は日本の東洋史学徒の必読書となっている。ほぼすべての分野において、強い影響力を持っている。近代史分野においても Paul A. Cohen.

Discovering history in China : American historical writing on the recent Chinese past. Columbia University Press, 1984 (邦訳: ポール A. コーエン (佐藤慎一訳)『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社, 1988) といった、「西欧基準」ではなく、「中国に即した」歴史像を求める動きが強まった。例えば、日本では長く阿片戦争以降 1949 年までを「近代」と称してきたのに対し、近年、阿片戦争以降も含め、辛亥革命以前を「清代」と称するようになって来のには、その影響もあろう。だが、こうした中国中心主義に対しては反論も少なくなく、本野英一 (『伝統中国商業秩序の崩壊—不平等条約体制と「英語を話す中国人」』名古屋大学出版会, 2004、Eiichi Motonu. *Conflict and cooperation in Sino-British business, 1860-1911 : the impact of the pro-British commercial network in Shanghai*. Macmillan, 2000) などは、西欧の影響の大きさを否定しない。

(a) 清明集研究

日本の宋代史研究者は、何故『名公書判清明集』をそれ程、好むのか？ 一部の中国の学者が考えているように、津田（高橋）芳郎氏が一早く同書を日本の学界に紹介したのがその理由ではない。その理由は、同書が、極めて下層の人々を紹介しているからである。無論、少なくとも訴訟当事者は、県尉と呼ばれていたり、最下級の武階を持っている——つまりある程度の社会的地位の持ち主である。しかし一方、親戚が乞食をしているような、全くの下層の庶民も現れる。このように、13世紀の本当の庶民の姿を見ることができる史料は、『清明集』だけである。多くの日本人研究者は、英雄や文人・士大夫ではなく、下層の人々により大きな興味を抱いている（日本史⁷・西洋史でも同じである）。

(b) 「寧波 Project」

学際的な研究計画だが、宋代史研究者が多い。

「研究目的の概要及び領域の特性」

本領域研究は、東アジア海域における人的・物的交流の歴史を多分野横断的に分析し、日本の伝統文化形成過程を再検討することを目的とする。具体的には、中国大陸において東シナ海に面する中核的港湾都市として栄えた寧波を焦点に、歴史的存在として不断に変化する大陸文化がそれぞれの時点においてどのように日本に伝来し、どう影響を与え、どう変容してきたかという問題を検討する。如上の目的達成のため、40歳代の中堅を核にして、歴史学・思想史・文学史・美術史・芸能史・仏教学・考古学・人類学・建築学・船舶工学・数学等の諸分野、総勢137人のメンバーにより、学際的総合研究を遂行して東アジア海域圏内に位置する日本文化の歴史的起源を再構成することをめざす

報告者が担当する「法文化班」では、高明士教授、甘懷真教授らを招きシンポジウムを開いた。全体では、台湾からは黄竟重教授、劉静貞教授らを招いている。

(c) 環境史

近年、環境と人間の関係から見た分明史が非常に話題になっている⁸。宋代史を含め、中国史のこの分野では、上田信氏が独創的研究を多く行っており⁹、岡元司氏にも研究がある¹⁰。

⁷ 代表として、網野善彦の著作を挙げたい。その著作の数は余りに多く、ここに列挙することは出来ないが、敢えて報告者が最も有名と思われる1冊と言われれば、『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』平凡社、1978を挙げたい。彼は朝廷・幕府など、政治権力とは別の秩序世界に生きた人々を描き、「日本」の限界性を描いた。

⁸ Jared Diamond. *Collapse : how societies choose to fail or succeed*. Viking, 2005は森林資源の存続からEaster IslandsやMaya文明の滅亡、ドイツや江戸時代日本における森林資源管理の成功、現代日本の環境破壊輸出、現代中国の環境破壊の危機などを論じる。

⁹ 上田信『森と緑の中国史—エコロジカル・ヒストリーの試み』岩波書店、1999、『トラが語る中国史—エコロジカル・ヒストリーの可能性』山川出版社、2002、『ON THE RECORD 「風水」

英語圏において、この分野の研究は少ないが、Mark Elvinの大著は重要である¹¹。

(d) Network 研究

思想史において特に重視されているのが、地域ネットワークの研究である。市来津由彦氏が代表的であり、福建北部の思想家groupの交流の表れとして、朱子学を分析している¹²。

(e) 社会経済史研究

筆者なりの概括をすれば、宋代以降の中国史の社会経済史分野において、近年日本で論じられている諸問題の焦点は、「所有」にあると思われる。例えば寺田浩明、岸本美緒らのこの分野での諸研究は、それに関わる。また岸本らが找価回贖問題などにおいて常に参照するのは津田芳郎の研究である。津田の研究は、『清明集』研究を一つの軸としながら、宋代社会経済史、法制史では最も高い評価を受けているものの一つである。無論、斯波義信の古典的著作も、その後の研究に甚大な影響を及ぼしている。

から見た中国の環境問題」『東亜』431, 2003、「封禁・開採・弛禁—清代中期江西における山地開発」『東洋史研究』61-4, 2003など。

¹⁰ 岡元司「南宋期浙東海港都市の停滞と森林環境」『史学研究』220, 1998

¹¹ Mark Elvin. *The retreat of the elephants : an environmental history of China*. Yale University Press, 2004

¹² 市来津由彦『朱熹門人集團形成の研究』創文社, 2002